

これまで4回にわたって、ケアの移行について、親、きょうだい、本人の立場から考えきましたが、最後にケアを受け継ぐ側の専門職の立場から考えたいと思います。

### 専門職がみずから支援に自信がもてない

ゆたか福祉会の調査によると、支援への満足度（当事者・家族には「満足しているか」と、職員には「支援に納得しているか」と尋ねました）については、当事者・家族・職員の順に低くなっています。つまり、当事者・家族が満足を感じているほどは、職員は自分の支援に納得できていないということです。

このような結果になつた背景として、ゆたか福祉会に限らず、一般的に福祉現場をとりまく状況から二つのことが考えられます。一つには、職員側の要因として、業務が多忙だったり、非正規化が進んでいたりして、十分に支援を振り返る機会がないなかで、自分の支援に確信がもてないということが考えられます。もう一つは、家族側の要因です。障害者（児）を守る全大阪連絡協議会・きょうざん大阪支部が実施した調査<sup>①</sup>では、

# 高齢期を迎えた 障害者と家族

老いる権利の確立をめざして

## 第8回

### 家族から社会へケアの 移行を考える⑤ —専門職の視点から

田中智子  
佛教大学



なかともこ／専門は障害者のいる家族に生じる生活問題、障害者福祉援助の専門性。著書に『知的障害者家族の貧困—家族に依存するケア』（法律文化社）、編著に『いっしょにね!! 一障がいのある子もない子も大人たちも輝くために』（クリエイツかもがわ）など。

提寺に本人を連れて納骨に行つたという話などを聞きました。

しかしながら、これらの多くは職員の勤務外の時間帯、あるいはそれに係る職員を出すために現場にしわ寄せが生じるなど、職員のボランタリリーに依存していることも否めません。

職員は、当事者の衣服の乱れなどケアが適切にされていないとか、これまで熱心だった親御さんが行事に参加しなくなつたことなどをきっかけに、親の異変に最初に気づき、その後、関係機関について当事者と親を含めた家族全体の支援の調整に入るなど、親のケアのキーパーソンとして、多くの時間とエネルギーを割いています。

### 親からケアを引き継ぐ実践

8月号で親の立場からみたときに、自分がこれまで行ってきたケアがどのように引き継がれるのか、見通しがもてない状況にあると書きましたが、ここでは専門職の立場からみた親からケアを引き継ぐ経験を紹介したいと思います。ゆたか福祉会の鳥田さんは、現在、80歳代前半の林さんの支援に関わって、レポート報

に、入退院を繰り返すようになります。が、病院からグループホームに戻つてくることを本当に林さんが望んでいるのかということを確認するために、一時退院をしてもらって本人の様子を仲間や職員で確認するということを重ねます。また職員集団として、どこまで支えることができるのかということを摸索するため、他職種との話し合いや制度の活用などさまざまな工夫をしていきます。今